

НИКОЛАИ НИКОЛАЕВИЧ
ПРОКОПОВИЧ:
ВОПРОСЫ СИНТАКСИСА
РУССКОГО ЯЗЫКА

浅 岡 宣 彦

本書はソ連のロシア語学者 Н. Н. Прокопovich 氏の論文集で、13 編の論文と付録とから成っている。著者自身の経歴についてはよく分らないが、54 年に出版されたアカデミヤ文法⁽¹⁾（以下 I と表示）の語群（словосочетание）の項で数章を執筆していること、それから、形容詞語群に関する彼の主著『現代ロシア文語における語群』（1966 年—以下 II と表示）の著者として知られている。13 編の論文はさらに一部と二部とに分けられ、『形動詞の統辞論、形容詞の統辞論』と題された第二部には、被働形動詞に関する未発表の学位論文（1941 年）と、孤立定語、拡大定語としての形容詞を扱った論文（1947 年、1952 年）の三編が入っていて、著者の学問的関心が形動詞、形容詞から出発したことを示している。しかし、これらの論文では語群の観点からの分析はなされていない。著者が語群との関連を深めたのは I の執筆と関係しているようであり、それ以降の論文は形容詞を中心とした語群の研究と、語と語群、文と語群との相互関係の考察に向けられている。他の 10 編の論文はそうした問題を取り扱っており、それ故、『語群の統辞論、文の統辞論』と題されて第一部にまとめられている。

最初に位置している論文『語群論、その対象と統辞論体系における位置』は論文集全体の綱領的作品であり、その理論的基礎づけ

は I の統辞論の序文等で展開されている В. Виноградов の説によってなされているが、ここでは主としてこれを取りあげることにする。

現代のロシア語文法には語群に関する統一の見解はない。それは統辞論の定義と、その研究対象、課題の理解の相違によるものであるが、この点を踏まえたうえで著者は統辞論単位としての語群の位置を追求している。その出発点はソシュールのシンタグマ説である。「統合（シンタグマ）はつねに二個以上の接踵⁽²⁾単位からなる」というソシュールの定義では、その構成要素として語のほかに、派生語の形態素、合成語、語群、文肢、全文が含まれている。この包括的定義は、その後彼の後継者たちにより、まず語に内在する《内的シンタグマ》と二語以上の結合を示す《外的シンタグマ》に分類され、外的シンタグマはさらに《叙述シンタグマ》と《限定シンタグマ》、ないしは《並立シンタグマ》と《従属シンタグマ》という具合に、より具体的内容をもつ用語に細分化され、より明確な定義づけがなされていった。この過程を詳述したあとで、著者はこの外的シンタグマがロシア語の словосочетание の広義の意味に該当すると指摘している。それ故、ロシア語の語群をこれに近い意味で用いている人々、たとえば Ф. Ф. Фортунатов 等は、語群（語結合）と語の結合とを文字通りに同一視し、二個以上の独立語の結合を全て語群に含め、文を語群の一変種と見做している。これは語群に関する見解の一方の極をなすものである。他方の極に立つのが В. В. Виноградов の説であろう。彼は統辞論単位としての語群を語（単一語、合成語）と文（単文、複文）とから峻別し、並立シンタグマと叙述シンタグマを外的シンタグマから除いた部分、すなわち、一致、支配、附加の関係で結ばれた従属シンタグマ（従属語群）のみを語群に含めている。本書

の著者が словосочетание の狭義の意味で用いているのはこの従属シンタグマであり、それを《本来のシンタグマ》、《本来の語群》と呼んでいる。「本来の語群、狭義の語群とは、命名の機能を有し、叙述性のあらゆる要素（すなわち、叙想法、時制、人称のカテゴリリー筆者）を欠いた語の従属的結合である。⁽⁴⁾」

とはいえ、語の並立的結合や叙述的結合と従属語群との境界は明確なものではなく、相互に浸透し合う可動的なものである。それ故、両極の間には、たとえば、従属語群のみを認めてはいるものの、相互依存の形で結ばれている叙述的結合も従属語群の中に含め、並立的結合は語群の構成要素として、成分を拡大するものと主張している説（А. Н. Гвоздев⁽⁵⁾）もある。

このように、語群の解釈は語の並立的結合、叙述的結合、従属的結合の内、いずれを語群に含めるかによって違ってくる。それが語群の定義そのものと関連していることは言うまでもない。「語群とは独立品詞に属している二個以上の語の結合によって構成され、ある単一の、しかし分解される概念、または観念を表示する文法単位である⁽⁶⁾」という В. В. Виноградов の定義は広義の語群説にも通用しそうである。問題は語群の属性であろう。そこで著者は、従属語群の特徴として以下の三点を指摘している。① 被限定と限定関係（シンタグマ関係）② 語の従属的結合には必ず主要語と従属語の二要素がある。③ その構造は二成分からなる бинарность（二元性）を特徴とする。つまりその構造の基礎にはつねに単純語群のモデルがある。この三点に、さらに以下の二点を付け加えることが可能であろう。④ 語と同様、命名の機能を果たし、⑤ 要となる任意の独立品詞の語のまわりに組織される。これらの点から他の語の結合を調べてみると、語の並立的結合には

主要語はなく、従って限定関係もない。その成分は同種関係で結ばれている。その他の特徴にしても同様に該当してはいない。これが語の並立的結合を語群に含めていない著者の最大の理由である。とはいえ、語の並立的結合はその形と機能とにおいて一様ではなく、少なくとも、文中で同種成分の機能を果たし、量的に制約をうけない結合と день и ночь の如く、命名の機能を有し、対をなして慣用的に用いられる表現とに大別されるであろう。В. В. Виноградов は後者を本来の語群に含めうると判断している⁽⁷⁾。同種成分の場合はさらに主成分と二次成分とに分けられるが、二次成分の例をひいて疑問点を指摘しよう。1/внимательный и ласковый взгляд 2/внимательно ласковый взгляд

2) は従属成分としての単純語群^{プラス}＋主要語の複合語群である。1) は二個の形容詞がそれぞれ名詞にかかっている。この場合、二個の形容詞だけの結合を語群と認めないとしても、А. Н. Гвоздев 説の如く、単純語群の拡大構造と見なすことは不可能であろうか。この点に関する著者の見解は残念ながら曖昧であり、未だ十分な研究がなされていないという指摘だけにとどまっている。主成分の同種結合の場合は、叙述結合を語群と認めることが前提条件となるから、二次成分の場合と事情は同じではない。

В. В. Виноградов は語の同種性（однородность）と同様、叙述性（предикативность）の問題も、語群ではなく、文の統辞論に属すると強調している。「語の叙述的結合は人称、時制そして叙想法のカテゴリリーで統一されており、命名ではなく、伝達の単位となっている。語群と文との間に一線⁽⁸⁾を劃するのはこの叙述性のカテゴリリーである。」それ故、叙述的關係を表わす語の結合は全て語群から取り除かれている。たとえば、形容詞などの孤立定語、名詞、動詞に対するそれら

の後置、名詞の結合等がある。これは同時に本書の著者の見解でもある。例を挙げて疑問点をひとつだけ記してみよう。1/вызов врача на дом 2/приехал по вызову директора 1)は вызвать врача の意であるから、客体関係を示し、語群である。2)の場合は、директор вызвал/вызывает/で、主体=限定関係を表わし、語群を構成していない、と著者は説明しているが、次のような結合の場合にはどのように判断したらいいのであろうか。использование поэтом различных литературных жанров (これは поэт использует различные литературные жанры の意である。)

これらはほんの一例にしかすぎないが、語の並立的、叙述的結合と従属語群との間にはいずれとも断定し難い中間的状態の結合が存在しており、それらの解決なしには語群論の発展はないであろう。本書の著者は語群の境界を従属語結合に限定し、その枠内の問題にのみ考察の目を向けていたわけではなく、むしろ、その境界を拡大し、語群の果たす機能と役割の増大を目差していたと思われる。そのことは他の論文のテーマを一瞥しただけで明らかであろう。たとえば、1) 語群と複合形容詞(つまり語)との境界、2) 語の分解と語群の形成、3) 語群と挿入=叙想語との関係、4) 文の構造における語群の分解と新しい語群の形成過程…等がある。これらの観察、考察は形容詞語群に限られてはいるが、今後の語群研究にとって貴重な手掛りとなるような、独創的で、有益な指摘や提言に満ちている。その内で特に興味深い観察を二つ指摘しておこう。1) 著者は語の結合を偶因的結合関係(окказиональные сочетания слов)と絶対的結合(категориальные сочетания слов)とに分類し、前者の後者への移行を歴史的に解明している。2) 語群と複文との関係で、主文の形容詞が従属副文と結

合し、拡大しうることを観察し、単純語群のモデルとの相関関係を指摘している。例、довольный победой, довольный тем, что победил これは語群の発展の可能性を示す興味深い観察である。

このほかにも語群の種類(単純語群、複合語群)、分類(動詞語群、名詞的語群、限定辞語群、副詞語群)等重要な問題に触れているが、全て割愛しよう。最後に不満を述べるとすれば、語群の研究に文体論的考察が加えられていないことである。パラレルな表現の指摘だけでは不十分であろう。また、いわゆる《弱支配》の語群や、語群の成分の孤立化ひいては分解に導いたり、あるいは新しいモデルの形成に導いたりする結合手段、即ち前置詞、小詞、語順、格、イントネーション等のより綿密な研究が必要とされるであろう。ともあれ、本書の内容はⅡの一部とかなり重複している部分があり、その意味からもⅡと併読することが望ましい。

注

1. “Грамматика русского языка” Академии наук СССР т. 2, ч. 1 1960 г.
2. ほかに、語群に関しては以下の論文がある。
 - (i) “Введение в синтаксис русского языка/Аннотация/” 1948 г.
 - (ii) “Основные принципы русского синтаксиса в “Грамматике русского языка” Академии наук СССР” 1954 г.
 - (iii) “Вопросы изучения словосочетаний/На материале русского языка/” 1954 г.
- В. В. Виноградов: “Избранные труды. Исследования по русской грамматике” Изд-во “Наука” 1975 г.
3. ソシュール(小林英夫訳)『一般言語学講義』岩波書店 1972 年 p. 172

4. 本書 p. 20
5. А. Н. Гвоздев: “Современный русский литературный язык” ч. 2 Изд-во “Просвещение” М. 1968 г.
6. I の p. 6
7. 注 (2), (ii) に所載 上掲書 p. 225
8. 同上 p. 223

НИКОЛАЙ НИКОЛАЕВИЧ ПРОКОПОВИЧ: *ВОПРОСЫ СИНТАКСИСА РУССКОГО ЯЗЫКА*
Изд-во “Высшая школа” Москва
1974 г.

Harry T. Moore: *The Priest of Love: A Life of D. H. Lawrence*

井 上 義 夫

その奇異なる為人のために、D. H. ローレンスの伝記は殊に中立的な立場からは書き難いものらしい。妻フリーダや C. カーズウェル、あるいは J. チェンバーズらの如く、当初よりローレンスの偉大さや優しさを讃える意図で書き始めた者は、それぞれの記憶に刻まれた印象の度合に応じて、なるほどこの天才の人物をよく伝え得た。逆に、ローレンスという人格を己れの人格で量る意図を心底に持つ者は、M. マリの如く、卑小かつ病的な利己主義者としてローレンスの姿を伝える場合が多かった。R. オールディントンの手になる伝記もいささかその嫌い無しとはせぬが、この種の伝記は大半ローレンスを藉りて

自身の卑陋を語る点で、読者には要らぬ不快を与えるものであった。むしろ梓に上せぬのが幸いであったような書である。

元来ローレンスという人に随うには、この天才の世間的意味に言う欠点を許容する寛恕^{寛とろ}か、さもなくば絶対の帰依が不可欠であった。後者の感情はローレンスの女性崇拜者が彼に対して抱き、よく前者の寛容を持した者は、著名な人物では独り A. ハックスレーのみであったと考えられる。ローレンスの死後、その知遇を得た人々が伝記を著した後、この作家に面識ない所謂ローレンスの研究家が客観的な眼でその生涯を見直し始めたことは当然のなりゆきであった。なかでも H. T. ムアによる伝記は、その細密さと多種の資料の活用によって異彩を放つものである。ムアは恰もローレンスの愛読者に関心ある事柄を知悉するかの如く、遺漏なくそれらを明るみに出して読者を惹きつける。例えば J. チェンバーズのしたためた草稿がローレンスの筆を俟って『息子と恋人』の一節に変わる様が如実にここに再現される。クロイドン時代の Davidson 小学校校長が往時のローレンスを回想して著者に宛てた長文の書簡は、目新しい資料として読者を瞠目させ、イエイツ、バウンド等と同席した会合の、純真にして要領を得ぬ若きローレンスの挙措も、Ernest Rhys の回想記から適切な箇所て引用される。あるいは『イタリアの薄明』等の初出の異稿の紹介は、その存在の指摘により貴重であり、読者を退屈させぬ範囲で能く改稿の意味を説き得てもいる。

別してこの伝記は、ローレンスに係わった人々の経歴に詳しい。フリーダ・ウィークリーは言うを俟たず、J. チェンバーズ、ルイ・パロウズ、ヘレン・コーク、M. マリ等が、その人生の如何様な過去の日にこの天才に遭遇したかを、ムアはつとめて明らかにする。ルイ・パロウズを除けば、各々自らロー